

# 国指定史跡「向羽黒山城跡」

## 歴史講演会

日時 平成26年6月14日(土)

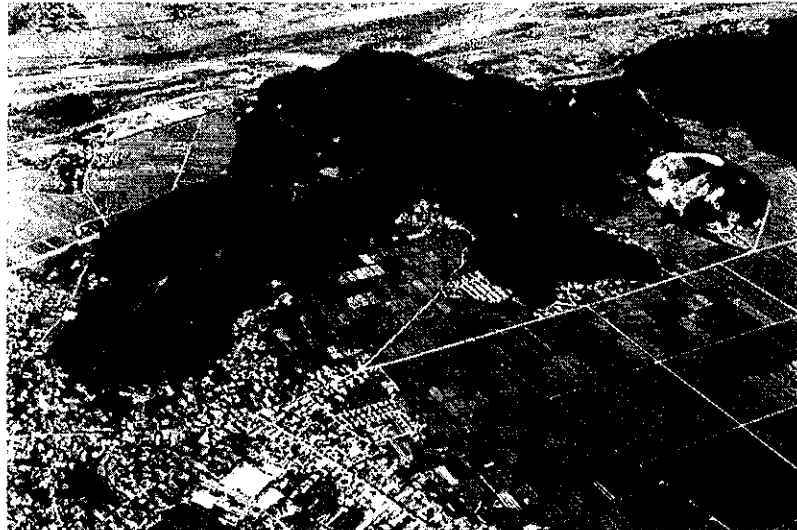
午後2時～4時

会場 会津美里町本郷公民館 2階会議室

講師 矢田俊文(やたとしふみ)

(新潟大学教授)

演題 「中世・近世の災害と会津」



向羽黒山城跡航空写真

主催 会津美里町教育委員会

## 講師プロフィール

1954年(昭和29年) 鳥取県生まれ  
1982年(昭和57年) 大阪市立大学後期博士課程単位取得満期退学  
1996年(平成8年) 大阪市立大学博士(文学)  
現在、新潟大学人文学部教授、災害・復興科学研究所副所長  
専門分野は、日本中世史・地震史料学

### 主な著書(単著)

『日本中世戦国期の地域と民衆』(清文堂、2002)  
『上杉謙信』(ミネルヴァ書房、2005)  
『中世の巨大地震』(吉川弘文館、2009)  
『地震と中世の流通』(高志書院、2010)

### 主な編書

『新潟県中越地震 文化遺産を救え』(高志書院、2005)  
『震災避難所の史料 新潟県中越地震・東日本大震災』  
(矢田俊文・長岡市立中央図書館文書資料室共編, 新潟大学  
災害・復興研究所危機管理・災害復興分野、2013) など

### 主な論文

- ・1751年越後高田地震による被害分布と震源域の再検討(共著)  
矢田俊文, 卜部厚志, 資料学研究, No. 8(2011)
- ・1498年明応地震による遠州灘沿岸浜名川流域の地形変化-掘削調査による地質学的検討-(共著) 藤原 治, 小野映介, 矢田俊文, 海津正倫, 佐藤善輝, Vanessa Heyvaert, 歴史地震, No. 25(2010)
- ・1828年三条地震による被害分布と震源域の再検討  
矢田俊文, 卜部厚志, 資料学研究, No. 7(2010)
- ・1828年三条地震における与板町の被害  
矢田俊文, 卜部厚志, 災害と資料, No. 4(2010)
- ・明応地震と庄内沖地震の津波被害 矢田俊文, 季刊東北学, 28号(2011)
- ・東日本大震災と前近代史研究 矢田俊文, 歴史学研究, 884号(2011)
- ・三・一一以後の文化財・歴史史料保全の取り組み—新潟県を中心に—(共著), 矢田俊文・原直史・中林隆之・池田哲夫・飯島康夫・小野博史・齋藤瑞穂, 新潟史学, 66号(2011)
- ・文献史料による1833年庄内沖地震の津波到達点の研究—新潟市内を中心に— 資料学研究 9号(2012)
- ・一八三三年庄内沖地震における越後の津波到達点と水死者数  
災害・復興と資料 4号(2014)
- ・史料に記録された中世における東日本太平洋沿岸の津波(共著)  
行谷裕一・矢田俊文, 地震 第2輯第66巻4号(2014)

## 中世・近世の災害と会津

国指定史跡「向羽黒山城跡」歴史講演会

2014年6月14日(土) 14時～16時

会津美里町本郷公民館

主催：会津美里町教育委員会

矢田俊文(新潟大学人文学部, 災害・復興科学研究所兼任)

### 1. はじめに

#### 1-1 越後蒲原郡三条大崎鋳物師と会津法用寺梵鐘

新潟県三条市下町遺跡(しもちょう、西大崎2丁目)を生産の本貫地とした大崎鋳物師  
法用寺(福島県指定文化財)の梵鐘銘

「大工越後国蒲原郡大崎住

妙実

火玉大工相合奉鋳也

文明六年(甲午)六月廿一日」

○火玉。会津美里町(旧会津本郷町)大字火玉。火玉に鋳物師がいた。

○文明6年(1474)、八十里越を越えて奥会津に出て、只見川沿いを下り、法用寺に向いた

#### 1-2 「あいず」と「えちご」の境はどこか

##### 1-2-1 新潟県立歴史博物館所蔵大見安田氏文書 永正5年(1508)長尾為景書状

草水津口へ牢人出張候処、頓速御動、被遂一戦、得勝利、敵会津へ被追越由、山吉所訖御註進、則令披露候  
之処、被成 御感書候、今度御動誠無比類次第候、弥無御越度様、堅固之刷簡要候、北条事今明日中可為落  
居候、可御心安候、恐々謹言、

長尾

為景(花押)

五月十八日

安田但馬守殿

○草水は、新潟県阿賀野市(旧安田町)。この辺りが会津葦名氏と越後勢との境界

##### 1-2-2 新潟大学附属図書館所蔵木村家文書 引札(関東講定宿 新潟古町平野や勝次郎宿)

関所の位置をみる

### 2. 1536年(天文5)白鬚水

会津旧事雑考によると、天文5年の白鬚の水の記録は次のようである。会津旧事雑考は、保科正之の命により、向井吉重が寛文12年(1672)に完成させたもの。

天文五年丙申

六月二十八日洪水、民屋亦多漂流、時白鬚老翁坐屋棟流去、因俗称白鬚水、至今譬為洪水極、今日鶴沼川亦  
大北決為今大河云、精繹自往古迄今日、此水脈本源、自白河郡境羽取村鶴沼出、(雖諸水合自源頭直去者鶴  
沼下流也、故称乎)。直北流下至于向羽黒東北岩崎崖下、西折直去者二里余、激橋爪村東畔、転直北西去、  
与宮川及赤沢川等、合下流至山崎入新橋川、自関山峠界至稻川界、大沼与会津両郡界也。然今日自岩崎西橋

詰村二里余埋為陸。〈此間今為田、云古河新田、開寛永始〉。下流大決北流、經蟹川及佐野等村入新橋川、其自岩崎迄至蟹川之間呼云大川。〈此大川之分応永之頃、可謂黒河川〉。与旧鶴沼下流、中絶却去為別河、徒自岩崎北崖下、〈去百歩計、旧鶴沼水脈也、自其去北西者否〉。疏支流去五、六里至安田村東、与宮川合自此合水下流者亦旧鶴沼之水脈也。故自彼岩崎迄合水之地五、六里之支流、名鶴沼堰、水細用水耳、而却鶴沼川之旧名失焉。是如上説、今日岩崎与橋詰其間二里余、埋為陸中流絶矣、下流者亦与宮川通、並為二水、故後決用水自岩崎、引支流、至安田村、通旧鶴沼下流、因旧謂鶴沼堰耳 然非全旧水脈、是亦応永己亥決者、因下弁焉、且自岩崎下流變為大川者、亦旧有水脈真綿邑辺、謂木戸堀云者、今佐野川・蟹川其旧名、蟹川与岩崎間今云大川者、応永之頃云黒河川乎。如何者塔寺略記曰、応永二十六己亥七月 黒河川自今羽黒下 〈今向羽黒〉 押切付鶴沼云。亦高田略記曰、同丙午九月三日洪水、黒川赤沢 〈此頃赤沢川水脈有寒川辺乎地、今如爾然則中于今鶴沼堰与宮川合水之当頭也、今赤沢入鶴沼者遙下流也〉 迄云田地損。是異筆同説、則岩崎之水脈有黒河川名者明矣。是近于黒河市井故可有名矣。且鶴沼川往古為大会津与大沼兩郡境者、及応永己亥、自今羽黒下決云者、与今日為大川者共為因弁焉

(図2枚、鶴沼川会津大沼兩郡界図・鶴沼決為大川之図)

抑今黒川水脈未審伝云、興徳寺前架通津橋者雖爾也、 実湯川也云。尤架通津橋者亦湯川支流也。且府号黒川者本依郷名云、釋於先輩筆跡黒川府門田也。此庄東十二村、西十二村在焉故間十二村郷稱焉、其西十二村荒井小松田村山和泉下荒井等也、云東十二村八角滝沢稱焉者筆跡在焉、然米代小高木等亦可其数、且称東黒川東館者在焉。然西十二村郷亦称黒川乎、如此、則彼大川水脈有黒河川名者、益親矣、太守父子居可有東西者、至徳紀弁焉。

○130年前のことが記される。〈 〉は2行割 ○現在の鶴沼川を流れていた阿賀川が、天文5年6月28日の洪水で、現在のようにまっすぐ北に流れる流路に変わったと図入りで記されている。

○ 向羽黒城の北の防備と自然環境

### 3. 中世・近世の会津の災害 概観

#### 3-1 塔寺八幡宮長帳裏書

旱魃, 増水, 地震, 大風, 不作, 出水, 大雨, 飢饉, 日照,

#### 3-2 寛文以来万覚, 文政以来万覚より

旱魃, 洪水, 地震, 火事, 大風雨, 大雪, 痘瘡・はしか, 鼠, 大水出, 霜, 鼠・熊, 雪崩, コレラ, 疮瘡

### 4. 1611年慶長会津地震 慶長16年8月21日

#### 4-1 被害を受けた地域

4-1-1 言緒卿記 (十一月) 二日丁酉、天晴、八月九日ニ会津ノ柳津大地振、堂舎仏閣悉破滅之由、於御城、新庄宮内法印雑談有之了

○言緒は山科言緒。○「御城」は江戸城。

4-1-2 慶長日件録 十一月二日、晴、(中略) 新庄宮内法印相談云、八月九日会津郡大地震、城・町屋等悉転倒、柳津虚(空) 蔵堂破滅云々、堂後山崩、堂倒落溪川、本尊等悉不見云々

○言緒は山科言緒。○慶長日件録は舟橋秀賢の日記。舟橋秀賢は山科言緒と共に江戸に赴く。○新庄宮内法印は、常陸国麻生藩(茨城県行方市, 3万300石余) 初代藩主新庄直頼。新庄直頼・直定父子は始め豊臣秀吉に使え、関ヶ原合戦では西軍に属し、会津の蒲生秀行に預けられたが、慶長9年赦免される。

4-1-2 新編会津風土記 塔寺、柳津 被害

4-1-3 続年日記、異本塔寺長帳

大寺、柳津、塔寺、新宮、如法寺、法用寺（会津美里町） 震い倒れる。大破

#### 4-2 山崎新湖

1964年新潟地震, 2011年東北地方太平洋沖地震

#### 4-3 大杉山村の山崩れ 西会津町史 1994

小杉山村引移申時願書写

河沼郡小杉山村之義、古ハ大杉山村之端郷ニ御座候処ニ百三年以前慶長拾六年辛亥年大地震ニ而飯谷山拔落、大杉山村を人馬共不殘打禿申候、其節ハ大杉山村高五拾六石之處ニ御座候内三拾四石九斗九合拔土ニ而埋、殘式拾壺石九斗三升壺合ニ罷成候、其以後七拾九年以前、寛永拾貳年亥ノ年拾五之弁高を加、三拾六石九斗三升壺合ニ罷成候、其以後貳拾五年以前巳年御檢地被仰付、本田八拾四石四斗七升三合ニ罷成候、新田高貳拾七石壺斗六拾四合、合百拾壺石六斗三升七共罷成、漆木御役ハ大杉山百五拾本之御役、小杉山村ハ四拾五本之御役ニ御座候処ニ而、相納申候得与、大杉山村之御役共小杉山村ニ而相納申候得与、拔土之處ニ銘々之支配所をわけ定野木を守長生申候与御役相勤申候事、

(中略)

小杉山村肝煎 治左衛門 判

正徳三年巳八月 地首 平十郎 判

惣百姓代 作兵衛 判

野沢組郷頭 長谷川久七

御奉行様

御奉行 御代官 小川郷左衛門様

山崎勝蔵様 郡御奉行野沢組御預り

御兩人様三郡御奉行

諏訪伊助様 柴彦太郎様

是ハ郡御移行様 同 村松権助様

山河治太夫様

名倉忠左衛門様

小杉山村屋吸引移□□□願之義ハ村松権助様御附番ニ而被仰付被下置申候、

○大杉山村の 61,4%が土砂崩れで埋まる

大杉山村高 56石 (56石 8.4.0)

拔土により埋まる 34石 9.0.9 61.4%

残 21石 9.3.1

寛永10年(1633) 15石 高を加える

計 36石 9.3.1 小杉山村の高

#### 5. 1670年寛文越後地震

##### 5-1 榑原藩日記 新収2

5月14日条 村上より飛脚来る。去る5日、村上において大地震、しかしながら御城中・御家中・町中別状なし、上川・四万石のうち百姓家503軒禿る。死人13、馬2疋、田畠荒れ、植田ゆり込むなり。

8月10日条 5月5日、村上大地震に付き、四万石のうち家数533軒禿れ申すにつき、百姓ども手前まかりならず候につき、1軒に金子1分ずつ下さる。

#### 5-2 名倉信光日記 名倉 1991

(寛文10年〈1670〉5月5日)

昼九ツ半過ぎに大地震、これにより、筑前も三ノ丸へ出る。

手前なども登城、西の土橋石垣通し分地、少し破れる。

城より帰り8ツ半にまた地震。右の半分ほど大いにする。

また7ツ時分にも少し。

同じく六日の未明にもまた少し。

五日のうちに五度する。

五七日のうち、日二三度、五度ばかりずつ

○ 筑前は保科筑前守政経。保科筑前守政経は、寛文10年5月5日には会津にいた

○ 名倉信光日記の1670年越後蒲原地震の記事は、筆者が会津での体験にもとづく記事

## 6. 1710年会津南山地震

宝永7年(1710)8月4日 会津南山地震

1707年宝永地震の3年後 1707年宝永地震は南海トラフの地震

### 6-1 寛文以来万覚書

大地震ゆり候ハ宝永七年寅八月四日ノ朝五ツ時分ニ候、大地かハれ、家々ノ戸さま間々ニはつれ、大さわきニ候、此時より五十三年以前、万治元年(1658)庚戌ノ三月ノ地震同前ニ可有之候、其時、三王峠ゆりくつれ、大地かひきハれ候、其後、五十里も損、日光も損候へ共、此度之地震ほとニは無之候

### 6-2 朝林後編

(宝永7年8月)

一 同廿七日 松平肥後守御預所之内、会津南山去四日方七日迄度々地震にて百姓家十四五軒潰、山も少々崩、沼杯も埋候由、城内領分ハ無別条

○松平肥後守は会津藩主保科正容 正之の六男

○朝林は、幕府の記録を尾張藩が書き留めたもの

## 7. 1830年文政14年地震と1833年(天保4)庄内沖地震

7-1 「諏方曆」の枠外に記された記事 高田田中文庫会津高田町史編纂委員会 1995 を一部修正

文政十四年

十月八日 夜中大地震、所々大損申候 御城内大破、是ヨリ夜明方又々大地震引返シ少シツ、震事翌辰ノ春迄、十日ノ夜ハ仮小屋ヲカケ寝、夜中雨降、地震少々成、内ニ入ル、手前小屋ハ山三郎家敷へ掛ル、九日ノ夜ハ何方ニ而も表へ出、夜ヲ明ス、若松同断、仮小屋モ同断

(中略)

天保四年

十月七日 □□□地震、□中少□□□数度

廿六日坂下大地震、家一軒土蔵一禿レ、土蔵土数多落、大方放レル、竹(ママ)座敷ノ壁破レ、家ノ震フコト一尺余、酒屋左平次土蔵ノ間一尺七、八寸方計リ離レタルカ、突合屋根打込テ、水桶七、八分有之は震盈レル、刻限昼七ツ時、雨風裂、外ニハサマテナキヨシ、高田辺リハ内方五丈位ノコト也、考ルニ、坂下ハ去々卯十月九日ノ地震ニヒトシ

## 7-2 松平容敬日記

(十一月)

一、四日 陰晴不定、折々雪、昨夜積雪二、三寸

(中略)

五、先月廿六日八ツ時過大地震有之、新発田城下近辺家土蔵少々相痛迄ニ而左迄之義も不相聞候処、浜辺之義、地震後、半時程茂過大海嘯ニ相成、海水水四、五丈相嵩波打上ケ、民家禿、或ハ引浪ニ海中ヘ引きとられ、且出掛り候獵船何国共行衛不相分、怪我人・溺死人数多有之段、松ヶ崎村ニ而も人家七、八軒川江打落、獵船数艘行衛不知、死人拾人余有之段、新潟茂地震ニ而痛候家・土蔵多分ハ無之候へとも、津波町内江込入、床上り致候所も有之、浜辺江囲置候大船引波ニ而多分相痛、其外湊ニ有之候船共、陸江打上ケ散々こわれ、怪我人等も有之段、彼地出役之者申越候旨、其筋方申出候趣、奉行共方申出ル

○読み下しは以下のとおり

(十一月)

一、四日、陰晴定まらず。おりおり雪、昨夜の積雪二、三寸

(中略)

五、先月廿六日八ツ時過、大地震これあり、新発田城下近辺の家・土蔵少々あい痛むまでにて、さまでの義もあい聞かず候ところ、浜辺の義、地震の後、半時程も過ぎ大海嘯(ルビ-ツナミ)にあいなり、海水四、五丈あい嵩み、波打上げ、民家禿(つぶ)れ、あるいは引き浪に海中へ引きとられ、かつ出掛り候獵船何国ともゆくえあいわからず。怪我人・溺死人あまたこれある段、松ヶ崎村にても人家七、八軒、川へうち落ち、獵船数艘ゆくえ知れず、死人拾人余これある段、新潟も地震にて痛み候家・土蔵多分はこれなく候へども、津波町内へ込み入り、床上り致し候ところもこれあり、浜辺へ囲い置き候大船、引波にて多分あい痛み、そのほか湊にこれあり候船ども、陸へ打ち上げさんざんこわれ、怪我人等もこれある段、かの地出役の者申し越し候むね、その筋より申しいで候おもむき、奉行どもより申し出る

○庄内沖地震は出羽から能登まで被害を及ぼした日本海側最大の地震

○四、五丈は、一二メートルから一五メートル

○松平容敬日記は、会津藩主松平容敬の日記。翻刻は東京大学史料編纂所謄写本。庄内沖地震について記載されている内容は、次のようなものである。先月二十六日八ツ時過ぎ大地震があった。新発田城下近辺の家・土蔵は少し傷んだがそれほどのことではないようであるが、浜の地域は、地震の後、半時(約一時間)ほども過ぎたころ大津波になり、海水は四、五丈も嵩を増して波を打ち上げ、民家は潰れ、あるいは引き波で海中へ引き去られ、さらに海に出ていた漁船はどこに行ったのかゆくえがわからない。怪我人・溺死人が多くいた。松ヶ崎村では人家七、八軒が川へ落ち、漁船は数艘ゆくえがわからず、死人は一〇人余いる。新潟町

も地震で痛んだ家・土蔵はそれほど多くはないが、津波は新潟町の内へ入り込み床上りしたところもあった。浜辺へ囲って置いていた大船は、引き波でかなり痛み、そのほか新潟湊にあった船は陸へ打ち上げられてさんざんに壊れ、怪我人等もいた。かの地（越後）へ調査に出かけた者の報告が、奉行を通じて報告された。

## 8. おわりに

過去にあった災害に学ぶ必要がある

洪水

活断層

液状化

地すべり地帯

### （参考文献）

- 会津坂下町史編纂委員会, 会津坂下町史 歴史編, 会津坂下町, 1979
- 会津高田町史編纂委員会, 会津高田町史 第二巻 考古・古代・中世 資料編 I, 会津高田町, 1997
- 会津高田町史編纂委員会, 会津高田町史 第三巻 近世 資料編 II, 会津高田町, 1995
- 阿子島功, 「東北地方太平洋沖地震による地盤災害と土地履歴」『地理』56-12, 2011
- 石橋 克彦, 1670年寛文越後地震の震源域, 歴史地震 26, 2011
- 内蔵之助控, 文政以来万覚（只見町郷土史資料 5）, 只見町史編纂起草委員会
- 佐藤敏宏ほか, 「会津盆地西縁における新潟地震による地震災害」『福島大学理科報告』49, 1992
- 寒川 旭, 慶長 16 年（1611 年）会津地震による地変, 地震, 40, 235-245, 1987
- 寒川 旭, 日本人はどんな大地震を経験してきたのか 地震考古学入門, 平凡社新書, 2011
- 三条市生涯学習課文化財係, 平成 15 年度遺跡発掘調査速報展下町遺跡パンフレット
- 三条市生涯学習課文化財係, 三条遺跡物語 第 89 話 八十里越を越えた先人達 11 三条のものづくりルー  
ツ 大崎鋳物師 仏都会津へ行く その 2, 広報さんじょう, 2014 年 4 月 1 日号
- 三条市生涯学習課, 三条鍛冶のはじまりと発展, 三条市生涯学習課, 2013
- 高橋 充, 「会津慶長地震の被害と復興」『季刊博物館だより』101, 福島県立博物館, 2011
- 『朝林』研究会編, 朝林後編 共同研究報告 13, 名古屋学芸大学短期大学部地域文化研究センター・名古屋  
大学外国語大学国際コミュニケーション研究所, 2011
- 坪井良平, 日本古鐘銘集成, 角川書店, 1972
- 名倉英三郎編, 『名倉信充日記』, 名倉英三郎発行, 1991
- 西会津町史編さん委員会編, 西会津町史 第四巻（上）近世資料, 西会津町史刊行委員会 1994
- 目黒吉右衛門他, 寛文以来万覚（只見町郷土史資料 5）, 只見町史編纂起草委員会
- 文部省震災予防評議会・武者金吉編, 復刻日本地震史料 第一巻, 2012, もとは増訂大日本地震史料 1941
- 山口孝平, 近世会津史の研究 上巻, 歴史春秋社, 1978
- 矢田俊文, 文献史料による 1833 年庄内沖地震の津波到達点の研究—新潟市内を中心に—, 資料学研究 9, 2012  
新潟大学リポジトリからダウンロードできる
- 矢田俊文, 中世・近世初期越後における地域と遺跡, 越後国域確定 1300 年記念事業 記録集, 新潟県教育委  
員会, 2013